

SHORT ESSAY

日本人の微笑

菊池 佐紀

Saki Kikuchi

きくち・さき 文芸誌「アミーゴ」主宰、県生涯学習推進講師。8月に「アミーゴ」50号記念号を発刊。地方で同人雑誌を定期的に発刊し継続して行くのは相当の努力と忍耐を要するのを改めて実感する。5月、県文化協会より10周年記念功労者として表彰を受けた。
9月、松山市男女共同参画推進センターで「伊予と小林一茶」を講話。北条市在住。

明治のころに來日した小泉八雲が一番面喰らったのが、日本人の顔に浮かぶ得体の知れない微笑だったそうである。客にステッキで殴りつけられた車夫がにこにこ笑いながら、しきりに頭を下げたり、夫がきのう死にましたと言っただけは笑んでいる女中の例など数多くあげているが、日本人は苦しいとき、恥ずかしいとき、氣落ちしたときにはほほ笑む習性があるのを彼は理解できなかったようだ。

自分の感情を無理に押さえようとする場合、その場に似つかわしくない笑みを浮かべる日本人は、喜怒哀楽を率直に示す外国人から見れば、不氣味な人種と受け止められかねない。

その微笑は、封建時代から抑圧されて自己主張もできず、我慢して生きてきた庶民の諦めの表情なのか。が、今でも、テレビの画面を見て氣付くのは、その奇妙な現象は現代まで脈々と受け継がれていて、一触即発の北朝鮮問題について街頭で意見を求められた人々が答えている顔は一樣ににこにこ笑っており、マジメ

に応じている様子は見受けられない。

平和が永久に続くと思いこんで平和ボケした現代人の危機意識のうすい笑顔はどこかでらけていて真率さを欠いて見える。「笑顔は作法の一部」と心得ているのかどうか、本心をかくした日本人の微笑は欧米人には、ふまじめ、卑屈と映るらしく、とかく誤解を受けがちだ。「顔で笑って心で泣いて」の芸当は自国民同士にしか通じないのだ。日本の外交下手の原因も案外この辺りにあるのかもしれない。

欧米人はあいまいな微笑で相手や自分を胡麻化そうとはせず、彼らは嬉しいときにだけ笑い、真摯に怒り、率直に意見をのべる。一つだけの例外は、あの謎めいた「モナリザの微笑」。

モデルともいわれているエリザベッタ夫人は最愛の我が子を亡くしたばかりだったので、その悲しみがあの美しいほほ笑みに微妙なニュアンスを添えたのだそう。